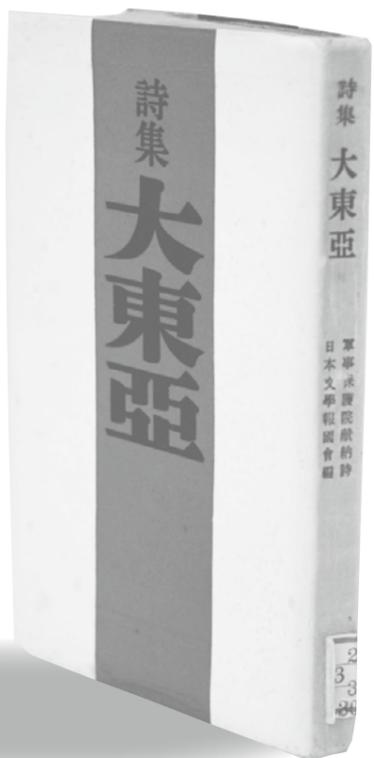
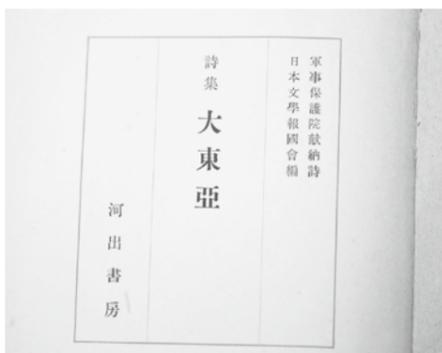


更科源蔵(さらしなげんぞう)
●1904(明治37)年、弟子屈町熊牛原野(南弟子屈)に生まれ、1985(昭和60)年に81歳で逝去。東京麻布獣医学校を中退した後、尾崎喜八、高村光太郎に師事し、詩作を中心に郷土史、アイヌ文化研究など主に文学活動を行った。
▶弟子屈町で所蔵しているさまざまな資料を紹介する。

著書の検印などに使っていた自作のエゾシカ印



『詩集 大東亞』

太平洋戦争が泥沼化してきた1942(昭和17)年5月、日本文学報国会が大政翼賛会と内閣情報部の後援でつくられました。会は、小説・詩・短歌・俳句などの部門に分かれ『詩集 大東亞』(日本文学報国会編)が発行されています。

この詩集は、詩部門(高村光太郎部会長)の詩人189人により、戦地で傷病を負った兵士たちを援護する軍事保護院へ献納するために編まれたものです。更科は第二詩集『凍原の歌』に戦争詩を書いていますが、この詩集には「友は征く」と題した詩を寄せています。

満州事変以降、1938(昭和13)年3月に「国家総動員法」が成立し、物資などが統制され、言論も統制されました。この時代の言論人や文学者は、言論弾圧に歯向かって投獄されるか、沈黙するか、時局に協力するか、無関係な作品を書くか、時局に反対するが発表はしないかの、いずれかしかなかったのです。

戦後、先の戦いをたたえた文学者の戦争責任が問われ、戦争協力者として非難されることになるのですが、名の通った文学者の中には、その後に編さんされた全集などには戦争を賛美した文章は載せず、そのようなことはなかったかのよう

に装う者もいたといわれます。

戦後になって更科は「日本は負ければ戦争に(筆者注)いいと思ったことは露ほどもなかった。略その罪を反省しろ」というのであろうか。(略)賢者のように身体をはって戦争を阻止すべきだったというのであろうか、(略)戦争指導者の真意は別として、大東亜の建設と祖国の自衛という、それを信じて愛国詩を高らかにうたいつづけてきた」と言います。また、更科を名指して「戦争中に大政翼賛会と共謀して同士を官憲に売り渡した」というピラがばらまかれました。そのピラに署名した者の中には「戦争中大政翼賛会に密着して、翼賛会に私を中傷していた連中である。戦争中は勇ましく日の丸の鉢巻きをしていたが、進駐軍が来て特高警察を開放すると、素早く赤い鉢巻きにしめ代えた(略)」と、小ざかしい輩もいたのです。罪なき者が裁きを、の心境でしょうか。

戦は勝った者が正義だといいますが、時代が下っても互いが正義と信じ、武器を持って戦う紛争は世界各地で絶えません。

再び、詩人たちが不幸な詩を書くことがない時代が来ることを願いたいものです。

※大政翼賛会(1940(昭和15)年、1945(昭和20)年に存在した日本の公事結社(治安警察法において、政治に関わりぬい公共の利益を目的とする結社)。



図書館だより

中央2丁目4番1号
☎(よいほんいろいろ) 482-1616

☆特集展示『ペットとす』

9月20日〜26日は動物愛護週間です。これに伴い、ペットを飼っている方、これから飼おうと考えている方に、ぜひ読んでいただきたい本を展示します。

この機会に、動物の正しい飼い方や小さな命について、考えてみませんか？

▼場所／特集展示コーナー

☆図書館からお願い

図書館の本の貸出期間は2週間までとなっていますが、期限を過ぎても返却されない方が増えています。予約が入っていない場合、貸出期間を一度延長することができますので、図書館へご連絡ください。次に予約が入っている場合は延長ができませんので、ご注意ください。

新刊案内

- 「世界地図の下書き」 朝井リョウ／著
 - 「月神」 葉室 麟／著
 - 「爪と目」 藤野 可織／著
 - 「僕らが世界に出る理由」 石井 光太／著
 - 「北海道あるある」 岡田 大／著
 - 「HOW TO 花贈り」 フラワーバレンタイン推進委員会／編
 - 「『聖書』と『神話』の象徴図鑑」 岡田 温司／監修
 - 「じいじとばあばのためのあそび図鑑」 NPO法人エガリテ大手前／監修
 - 「はじめて絵本 ふわふわパン作り」 おおでゆかこ／作
 - 「おトイレさん」 きたがわめぐみ／作
- たくさんの方が皆さんをお待ちしています！

おすすめの新聞

シルバー川柳 満員御礼

みやぎシルバーネット／編

大好評「シルバー川柳」第2弾。全句、60〜90歳代のリアルシニアが詠んだ川柳のみで構成。リアルな笑いの中にも、癒やしや生きる力が満ちていて、シニアだけでなく家族全員で楽しめます！

EMC通信

～川湯の森から～



EMCの歴史紹介コーナー

EMCは自然情報だけではなく地域の文化や歴史、人々の暮らしなどをつなぎ合わせた中心に存在するミューシアム(博物館)なので、町の歴史を紹介するコーナーも設けています。

館内の年表は「安政5(1858)年 松浦武四郎が北海道探検で弟子屈・屈斜路を踏査。その様子を『久摺日誌』にまとめる」という文

町の歴史を知るスタート地点としても！

言から始まっています。松浦武四郎が踏査した際に周辺を案内したのは、先住していたアイヌの人たちでした。彼らは硫黄山の硫黄をたき付け用として使っていました。そのことを聞きつけた漁場持地域の漁業のまとめ役である佐野孫右衛門が硫黄の採掘事業を始めたことで川湯の開拓が加速。大勢の人たちが仕事を求めて集まり、湯治場としても栄え、川湯温泉地につながっていくのです。

町内には、詳しい資料が展示してある「屈斜路コタンアイヌ民俗資料館」や「てしかがの蔵」などがあります。川湯EMCでは、これらの施設や町内にある松浦武四郎の碑などを巡るコースを「ぼん旅マップ」としてご案内しています。町内を探検しに行ってみませんか！

2階ギャラリー企画展 「新たな発見!? 弟子屈ってこんなところ」開催!

何事も事前準備が大切です。町内を探検する前に、まずはEMCで情報収集していきましょう！

9月の2階ギャラリー企画展は「新たな発見!? 弟子屈ってこんなところ」。この地に先住していたアイヌの人たちの暮らしぶりから始まり、硫黄山開発や開拓期を経て、大正～昭和時代へと移り変わり、観光地として栄えてきた町の様子を紹介いたします。気が付かなかった別の魅力が見えてくるかもしれませんよ。



てしかがの蔵収蔵品も展示

川湯エコミュージアムセンター(EMC) ☎483-4100
9月は8:00〜17:00開館(無休)